

天台山の済公信仰

山下 一夫

はじめに
済公とは
済公イメージの変化
天台の済公伝説
天台への済公信仰の伝播
天台山の済公史跡
おわりに

はじめに

天台山と聞いて、日本人がまっさきに思い浮かべるのは、天台宗のことだろう。平安時代、伝教大師最澄がこの地で天台教学を学び、帰国後比叡山で日本天台宗を開いたことは、よく知られた事実である。また森鷗外の小説で有名な、この地で活動したとされる風狂僧の寒山・拾得を挙げる方もいるかも知れない。いずれにしても、日本でのイメージはおそらく、仏教の聖地としてのそれであろう。

ただ、初めはそうではなかった。仏教伝来以前、天台山では神仙道の方士たちが活動し、後に道教が勃興すると、この地の玉京洞は十大洞天の一つとされ、さらに南宗の祖庭の桐栢宮が作られた。天台山は道教においても重要な聖地となったのである。¹



図一 天台赤城山の案内図 中央に済公像が描かれる

1 天台山における道教については、本誌に掲載されている土屋報告を参照されたい。

ところが現在の中国では、天台山は天台宗でもなく道教でもない、もう一つの別のイメージで語られている。それが、「済公の故地」というものである。

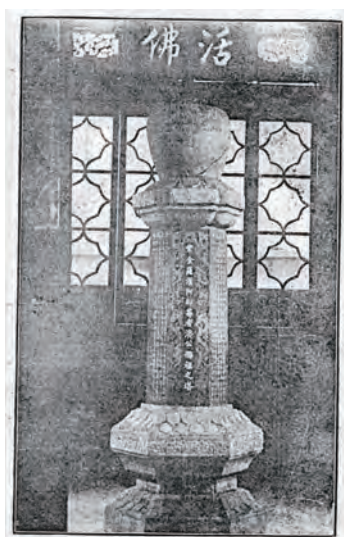
この済公という人物、かつては日本でもそれなりに知名度があったが、現在ではごく一部の好事家を除いてほとんど知られていない。しかし中華圏ではそうではなく、大人から子どもまで知らない者はいないばかりか、中国の歴代の宗教者の中でもトップクラスの知名度を誇っている。天台山は国内の中国人のみならず、海外からも多数の華人参拝客を集めているが、かれらの大多数は天台大師智顗でも寒山拾得でもなく、済公を拝みにやって来るのだ。この地に道教の聖地たる玉京洞や桐栢宮があることを知っているかどうかも危うい。

本稿ではこの済公という人物について、またそれが天台山で信仰されている状況について、少し考えてみようと思う。

済公とは

済公とは、後述するように俗文学から出て来た通称で、歴史的人物としては南宋の禅僧・道済（？—1209）を指す²。歴史的事実人物であったことは、杭州・浄慈寺の北磻居簡（1164-1246）の手になる墓誌銘、「湖隠方円叟舎利銘・済顛」³の存在によって確認できる。

これによれば、道済は浙江省天台臨海の人で、北宋の李遵勗の子孫である。李遵勗は大將軍・



図二 墓誌銘が刻まれた蘇州虎跑泉の済公塔（現存せず）

2 済公説話の成立についてはすでにいくつかのすぐれた研究がある。本章では主に以下の論考を参照した。小野四平「済顛説話の成立」（『中国近世における短篇白話小説の研究』，評論社，1978年，185頁-210頁）、波多野太郎「済顛語録の展開」（『東洋大学大学院紀要』十五号，1978年，85頁-111頁）、沢田瑞穂「済顛醉菩提」（『佛教と中国文学』国書刊行會，1979年，177頁-198頁）、Meir Shahrar, "Crazy Ji: Chinese Religion and Popular Literature", Massachusetts: Harvard University Press, 1998、張忠良『済公故事綜合研究』（秀威資訊科技有限公司，2007年）。

3 『北磻文集』（日本寶永三年常信刻本、早稲田大学図書館所蔵）卷十所収。

李繼昌の子で、真宗皇帝の妹・万寿公主を娶っただけでなく、天台宗中興の祖・四明知礼と親交を結び、『景德伝灯録』を継ぐ語録集『天聖広灯録』を編集するなど、仏教にも通じていた。つまり道済は、北宋仏教界の大物の末裔であるばかりか、宋の皇室の血筋も入っているという、実に由緒正しい家柄の生まれということになる。

また墓誌銘によると、道済は杭州の霊隠寺に赴き、南宋第一の禅者と称された瞎堂慧遠（1103-1176）のもとで得度、のちに浄慈寺の書記となって文才を発揮したが、檻樓をまとい酒を飲むなど風頗な行動が目立ち、「風頗の道済」ということで「済頗」と呼ばれたとも記されている。



図三 杭州の浄慈寺

道済の同時代資料は他にも幾つかあるが、注目すべきは、日本曹洞宗の開祖・道元の師匠として知られる天童如浄（1162-1227）による、「済頗」と題した以下の「賛」である。⁵

天台山裡五百牛、跳出顛狂者一頭。
煙花賽尽瞞尽眼、尾巴狼藉転風流。

最初の「牛」は、禅の『十牛図』などでは「探し求められるべき真の自己」の譬えとして用いられるが、ここではその境地に達した存在、すなわち「羅漢」の謂いと考えれば、「天台山裡の五百の牛」は、天台山の方広寺にある、五代の呉越王・錢鏐が建立した五百羅漢を指すことになる。その中から「顛狂なる者一頭」が「跳出」した、というのは、うち一柱が投胎し、済頗として生まれ変わったということなのだろう。また「煙花」云々はおそらく妓女の類を表す言葉で、全体としては、道済は色街に出入りするような破戒僧に見えながら、それは世間を欺く姿で、本当は羅漢の転生であった、ということになる。

顛狂なふるまい、中でも飲酒や女犯のような破戒は「悟り」の障壁であり、本来は許されるものではない。しかし仏が現世に降りてきただけの存在であれば、「悟り」は当然得ていることになるから、そうした行為も保証される。梁の達磨・宝志、唐の寒山・拾得・万廻・普化、五代

4 宋・運庵普岩「済頗書記」、『運庵普岩禅師語録』（正統蔵 No. 1379）所収など。

5 『如浄和尚語録』（大正蔵 No. 2002A）所収。

の契此、宋の志言・酒仙遇賢など、中国仏教史上に風顛僧は多数いるが、かれらが同時に仏の転生であり、神通力を有する神異僧であるのは、そうしたロジックに基づくものであろう。

逆に言えば道済も、そうして今まで繰り返して現れてきたパターンの一つでしかないことになるが、かれが他の風顛僧と決定的に異なっていたのは、南宋の首都・杭州で活動したという点である。

このころ杭州では、語り物・歌い物芸能が勃興してきていた。例えば明代の田汝成(1503-1557)に『西湖遊覧志余』という著作がある。西湖は杭州に位置し、風光明媚で知られるたいへんに有名な湖で、本書はいわばそのガイドブックなのだが、その巻二十に以下のような記述がある。

杭州では、盲目の男女の多くは琵琶を習い、古今の「小説」や「平話」を唱って生計を立てる。これを「陶真」という。物語の題材が多く宋代の事跡なのは、汴京時代の名残であろう。…(略)…『紅蓮』、『柳翠』、『済顛』、『雷峰塔』、『双魚扇墜』などはみな(南宋の首都であった頃の)杭州の話だが、おそらく近年になって新しく作られたものもあるだろう。⁶

杭州ではおそらく宋代以来、本邦の琵琶語りに似た「陶真」という芸能が行われていたこと、またその中に『済顛』という、明らかに道済の事跡を述べた演目があったことが伺える。すなわち道済は、繁栄する杭州で勃興した芸能において、「ご当地の名僧」として注目を浴び、面白おかしく語られたのである。

なお陶真の語りは、琵琶語りが『平家物語』テキスト成立に深く関わっているのと同様、明代までに成立した白話短編小説の一部と密接に繋がっており、『紅蓮』は「五戒禪師私紅蓮」(『清平山堂話本』所収)および「明悟禪師趕五戒」(『喻世明言』所収)、『柳翠』は「月明和尚度柳翠」(『喻世明言』所収)、『雷峰塔』は「白娘子永鎮雷峰塔」(『警世通言』所収)、『双魚扇墜』は「孔淑芳双魚扇墜伝」(『熊龍峰四種小説』所収)というように、ここで挙げられている演目は『済顛』以外、いずれも明代の白話短編小説集の中に見出すことができる。

では『済顛』はどうなったかということ、白話短編小説集の中ではなく、明の隆慶3年(1569)の『錢塘湖隱済顛師語録』という単行本が現存している。⁷一見すると禅語録のようなタイトルであるが、中身はそうではなく、道済の靈驗譚を中心に、まさに「面白おかしく」その事跡を述べる、語り物・歌い物との関わりが想定されるテキストである。⁸テキストの詳しい分析についてはいずれ稿を改めて論じる予定だが、まさに先に挙げた、梁の達磨・宝志、唐の寒山・拾得・万廻・普化、五代の契此、宋の志言・酒仙遇賢など、歴代の神異僧・風顛僧のさまざまなエピソードを道済の上に被せたものと言える。また作中では、道済の呼び名として始めて「済公」という表現が

6 杭州男女瞽者、多學琵琶，唱古今小説、平話，以覓衣食，謂之陶真。大抵說宋時事，蓋汴京遺俗也。…(略)…若『紅蓮』『柳翠』『済顛』『雷峰塔』『雙魚扇墜』等記，皆杭州異事，或近世所擬作者也。

7 日本内閣文庫蔵、明隆慶三年(1569年)四香高齋平石監刊。『古本小説叢刊』第八輯(中華書局、1990年)影印。

8 ただし、陶真から直接改変された訳ではなく、語録を講釈する説唱の一種が介在している可能性がある。小野四平前掲論文参照。

見えている。

『錢塘湖隱濟顛師語録』はその後、蘇州の張大復によって『醉菩提』という戯曲に改編され⁹、また明末の馮夢龍による『濟顛羅漢淨慈寺顯聖記』¹⁰や西湖墨浪子の『濟顛大師醉菩提全伝』¹¹など、文章やエピソードに手を入れて、小説のスタイルに仕立て上げたものも出版された。これらのテキストはいずれも杭州や蘇州といった江南地方で成立し、おおむね同一の内容を持つため、江南系テキストと総称される。中でも最後の『濟顛大師醉菩提全伝』¹²は大変に流行し、江戸期には本邦でも『通俗醉菩提』のタイトルで翻訳されている。



図四 『濟顛大師醉菩提全伝』挿絵中の濟公



図五 山東京伝『本朝醉菩提』表紙

ところで日本には、この濟公によく似た人物がいる。室町時代の禅僧、一休である。

現在、一休は主に小僧のイメージで語られているが、それは明治・大正期の少年講談の影響によるもので、江戸時代までは物語の中の濟公と同じく、神通力を持つ大人の風顛僧の姿で親しまれていた¹³。モデルとなった一休宗純（1394-1481）も、皇室の血を引き、文才に秀で、肉を喰らい酒を飲み、既存の風顛僧や神異僧の逸話を取り込んで物語として成長したという点でも、実に歴史上の道済とよく似ている。

濟公と一休の類似には、すでに江戸時代の戯作者・山東京伝が気が付いていた。かれは一休を題材とした読本を書いた際、『本朝醉菩提』、すなわち「日本の濟公」というタイトルを付け、さらに作中で『通俗醉菩提』からいくつもの場面を流用し、一休の逸話として語っている¹⁴。当

9 『醉菩提』鄭振鐸旧蔵抄本（『古本戯曲叢刊』三集、1957年）、『明清伝奇選刊 鸞鏡記・醉菩提』（中華書局、1996年）など。

10 明・馮夢龍『三教偶拈』、東京大学東洋文化研究所双紅堂文庫蔵明天啓間刊本。『古本小説叢刊』第四輯（中華書局、1990年）影印。

11 清・西湖墨浪子『濟顛大師醉菩提全伝』、慶應義塾大学蔵清刊本。

12 中村幸彦編『近世白話小説翻訳集（1）通俗醉菩提全伝・通俗隋煬帝外史』（汲古書院、1988年）。

13 明治以降の講談と一休説話の変化については、岡雅彦『一休ばなし・とんち小僧の来歴』（平凡社、1995年）144-167ページを参照。

14 『本朝醉菩提』における『濟顛大師醉菩提全伝』の影響については、拙稿「濟公故事在日本的流传与發展」

時の日本では、こうしたシャレが解るほど、済公はメジャーとなっていたのだ。

済公イメージの変化

杭州で形成された済公の物語は、清代以降、中国北方の語り物・歌い物芸能にも移植された。その結果、清末までに済公は「全国区」になってゆくのだが、同時にそのイメージも大きな変化を被ることになる。¹⁵

北方の芸能のうち、まず語り物としては北京の「評書」があるが、その確立者で康熙・乾隆年間に活動した王鴻興の弟子のうち、蘇奎慶、王奎海、齊奎遠、劉奎遠の四人が『済公伝』を演じたという記録がある。かれらの語った内容と直接繋がるのかどうかは解らないが、光緒年間に郭小亭が評書をもとに小説化したという、『評演済公伝』120回およびその続編『評演接続後部済公伝』120回がある。また歌い物では、北方で行われた太鼓を用いる「鼓詞」に『済公伝』の演目があり、咸豊年間の紀年のある写本が残っている。¹⁶

郭小亭の小説と鼓詞『済公伝』は、エピソードの順序や人名などに多少の相違はあるものの、内容はおおむね共通しており、いずれも神通力を持った風顛僧の済公が、多数の侠客を従えて秦府の役人や三清教の邪教徒たちを懲らしめるというものである。また同治年間に上演された記録がある京劇『趙家楼』も、このうちの一部分を演劇化したものである。先の江南系テキストに対し、これらは北方系テキストと称される。中でも郭小亭の小説は一世を風靡し、江南地方にも「逆輸入」され、あっという間に従来のテキストを駆逐してしまった。

江南系テキストは済公の「風顛」と「神異」のバランスが取れた内容だったが、北方系テキストは比較的単純な勧善懲悪劇となったため、済公の「神異」と侠客たちの「義気」にばかり重点が置かれている。宋代の名裁判官である包公の物語も、清代に北京で成立した『三俠五義』では同様の変化が見られるため、こうした点は北方の講唱芸能の特徴だと言えるだろう。しかし結果的に、済公は神通力で何でもかんでも解決してしまう、まさに神のような存在となっている。そして恐らくそのために、済公は本当に神として信仰され始めるのである。

民国4年(1915)、上海で「中国済生会」という、済公を信仰する宗教団体が設立された。¹⁷ 設立者は当時上海で活動していた在俗の仏教信徒たちで、中には『仏教大辞典』の編者として知られる丁福保も名を連ねている。かれらは、太平天国によって破壊されたままになっていた、蘇州虎跑泉の道済の墓の修復なども行っているが、活動の中心は「扶乩」であった。これは神下ろしによる神託行為の一種で、一般的に言って仏教や道教の「正統的」な神仏よりも、民間信仰に由来する神格が登場することが多く、そして後者は『三国志演義』や『西遊記』『封神演義』など俗文学作品と密接な関わりがあるため、小説や演劇から育ったに等しい済公が現れるのも、い

——以『通俗醒菩提』、『本朝醒菩提』為主、『國際済公活仏文化節暨済公活仏成道800周年慶典研討會論文集』(中国・マカオ東井円仏会、2008年)を参照。

15 本章の内容については、拙稿「郭小亭本『済公伝』の成立について——評書、鼓詞および戯曲との関係」(『中国古典小説研究』5号、1999年、47頁-57頁)を参照。

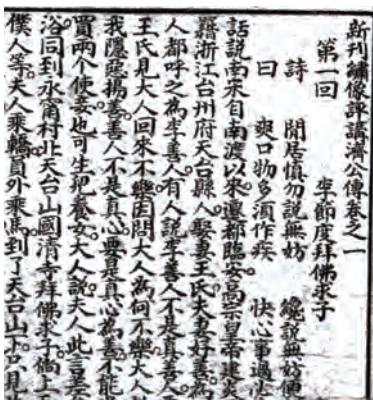
16 中央研究院傅斯年図書館蔵。

17 済生会については、王見川「清末民初中国的済公信仰与扶乩团体」、『民俗曲芸』162期(台北:財団法人施合鄭民俗文化基金会、2008年)139-169頁を参照。

わば当然の成り行きであった。また翌年の民国5年（1916）には、やはり扶乩で有名な宗教団体の「紅卍字会」の母体組織「道院」が、山東省浜県で発足しているなど、この種の宗教団体の出現は時代の趨勢でもあった。

また民国7年（1918）、中国初の近代的劇場である「新舞台」の経営者である夏月珊が、済生会の扶乩に従って京劇『済公活仏』を制作・上演したところ大変な評判となり、民国11年（1922）まで足かけ四年、二十二本まで作られ、全部で八十万元の利益となる興行的成功を収めた。¹⁸なおこの作品は、第一作制作時は十分な準備期間がとれなかったため、仕方なく既存の目連戯の白無常の姿を流用して、済公に高帽子に破れ団扇を持たせたが、そのために以後済公と言えばこのイメージが定着することとなった。

京劇『済公活仏』は、その後北京でも別のメンバーによって上演され、また他劇種や映画にも移植されて、全国的な済公ブームを巻き起こした。これは宗教界にも「逆輸入」され、紅卍字会のほか、先天道や一貫道、さらに徳教といった民間教派でも済公の扶乩が行われるようになる。特に一貫道の教主・張天然が「済公活仏の転生」を名乗ったことは、中国の宗教界に大きなインパクトを与えた。¹⁹



図六『評演済公伝』（繡像評講本）



図七 一貫道教主・張天然

戦後中国では、宗教的な演目や民間教派などは、「迷信的」とされて禁止されたが、海外華人の間では継続して行われた。香港や台湾のメディアは、戦前の中国のコンテンツを引き継いで発展した面もあり、『済公活仏』に由来する演劇・映画、さらにはテレビドラマなども多数作られ続けたのである。また、一貫道をはじめ多くの扶乩教団が、中国本土から香港・台湾などに活動の拠点を移し、現地の民間信仰にも大きな影響を与えた。今日、海外華人の間で済公の存在がよく知られているのは、直接的にはこうした戦後の動きに基づいていると言ってよい。

18 京劇『済公活仏』については、拙稿『『済公伝』の戯曲化と済公信仰—連台本戯『済公活仏』をめぐる』（慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』第82号、2002年、142-158ページ）、および「済公活仏形象在上海的転変与発展」（ソウル・中国文化研究学会『中国文化研究』第15輯、2009年、89-106ページ）を参照。

19 一貫道の問題については、拙稿「台湾における一貫道の展開と変容」（『協働体主義 中間組織が開くオルタナティブ』、田島英一・山本純一編、慶應義塾大学出版会、2009年、75-94ページ）を参照。

一方の中国本土では戦後長い間、済公の存在はタブーであった。特に朝鮮戦争勃発に際し、手薄となった国内の隙を突いて、済公を信奉する一貫道の残党が各地で武装蜂起を行ったことは、済公のイメージを決定的に悪化させた。ところが1985年に、突如として浙江電視台製作の連続テレビドラマ『済公』が、以下のような歌詞の主題歌に乗せて放映された。

草鞋はボロボロ、帽子もボロボロ、身につけている袈裟もボロボロ。あなたは私を笑う、あの人も私を笑う、団扇もボロボロだと。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。ははは、煩うこと無く、悩みも無く、愁いも無い。世間は移ろいやすくアテにならないことなど、とっくにお見通し。行こう、楽しくやろう。弱い者虐めがあれば参上だ、弱い者虐めがあれば参上だ。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。²⁰

ドラマの内容は小説『評演済公伝』と京劇『済公活仏』をベースにアレンジしたものである。ロケは、実際の天台山国清寺や杭州靈隱寺でロケが行われており、今考えると非常に贅沢なドラマ作りとなっている。もっとも今と違って、当時は国清寺も靈隱寺も参拝客はほとんどおらず、ガラガラだったのだろうが。



図八 連続テレビドラマ『済公』

1985年と言えば、改革開放製作が軌道に乗り始め、宗教信仰も許容されてきていたとはいえ、おおっぴらに「迷信」を語るのはまだ憚られる雰囲気があった頃である。そうした中、主題歌で「南無阿弥陀仏」を連呼し、済公が神通力で活躍して、仏教の奇蹟を説くこの作品は、当時としてはあまりにも画期的であった。そのため中国テレビ史上に残る大ヒットとなったが、現在の中国での済公のイメージは、ほぼこのドラマによっていると言って良い。

さらにこの作品は、済公のイメージを形作っただけでなく、一般の仏教そのものに対する興味もかき立て、たくさんの人が仏教信者となる契機を作った。済公を演じた俳優の游本昌氏は、その後どこに行っても「生き仏」扱いされ、自分が結果的に仏教の伝道者となったことに責任を

20 鞋儿破，帽儿破，身上的袈裟破。你笑我，他笑我，一把扇儿破。南无阿弥陀佛，南无阿弥陀佛，南无阿弥陀佛，南无阿弥陀佛。哈哈，无烦无恼无忧愁，世态炎凉全看破。走哇走，乐呀乐。哪儿有不平哪儿有我，哪儿有不平哪儿有我。南无阿弥陀佛，南无阿弥陀佛，南无阿弥陀佛，南无阿弥陀佛。

感じ、自らも出家して僧となったという。今日、中国の仏寺はどこに行っても参拝客で溢れかえっているが、その土台を作ったのは何とこのテレビドラマだとすら言えるのである。

天台の済公伝説

さて、テレビドラマ『済公』放映より前、文化大革命が終わったばかりの 1970 年代末のこと、浙江省天台県で、文化館の曹天志氏によって、「天台で伝承されてきた済公の伝説」なるものが大量に採集された。これは『天台山伝説』²¹や『中国民間故事集成浙江巻』²²などの民間故事集に断片的に収録された後、後に『済公伝説・済公童年少年故事』²³としてまとめられた。この中には、従来知られていなかったさまざまな済公説話が収録されており、読み物としても面白いものも多い。この「天台済公伝説」は、2007 年の道済没後 800 年という記念すべき年に、「国家級非物質文化遺産」の指定を受けた。済公は、中国を代表する無形文化の一つ、ということになったのである。

しかし「文化遺産」指定の理由が、「済公の故郷である天台で連綿と受け継がれてきた、歴史的価値のある口頭伝承」だからというのでは、ちょっと待ってくれ、と言いたくなる。たしかに天台山のふもとの天台の街は、済公の生まれ故郷ではある。しかし歴史的事実としても、また物語の上でも、済公の活躍の舞台は杭州であって、天台ではない。かれの物語も、杭州で「ご当地もの」として注目されたから発展したのであって、天台がこれに関わったことを示す記録はない。

もちろん文字資料が存在しなくても、800 年の間、口頭で受け継がれてきたという可能性は無いわけではない。しかしそう考えるには、天台の済公説話はあまりにも新しい要素が入りすぎている。一例として、『天台山伝説』に収録されている「小済公出家」を挙げよう。

済公は天台の裕福な家庭に生まれたが、…（略）…十六歳の時に父親の李茂春が亡くなると、状況は一変した。何人もの親戚が父に生前金を貸していたと言いはり、済公に残された財産を次々と掠め取って行ったのだ。済公の母親は弟の王安土に助けを求めたが、どうすることもできず、家にまだ少年の済公と下人の李仁を残して実家に戻ってしまった。そうすると親戚たちは今度は済公少年にたかり行為を始めた。毎日かれらの応対をしたことで、済公少年は日に日に磨り減っていき、ご飯も喉を通らない有り様となってしまった。

ある日、済公少年がぼんやり机に座っていると、下人の李仁が入ってきて言った。「あるご老人がやって来て、若旦那に会いたいそうです。」済公少年が慌てて出迎えると、眉も髪も白い老人で、仙人のような風体をしていた。済公少年はどこかで会ったことがあるような気がしたが、どうしても思い出せなかった。

老人が茶を飲みおえた後、済公少年は訊ねた。「ご老人はどこからいらっしゃったのですか。私にどのようなご用でしょうか。」

21 曹天志・肖冰編写、台州日報印刷廠、1993 年。

22 中国 ISBN 中心、1997 年。

23 曹志天・趙達樞編著、天馬出版有限公司、2007 年。

老人は答えず、立ち上がって済公少年の近くまでやって来ると、親しげに済公少年の肩を叩いて言った。「修縁、わしのことを忘れてしまったのか。わしらは昔からの友人だぞ。」

済公少年は目をぱちくりさせたが、やはり老人が誰だか解らなかった。老人は笑って言った。「まったく物忘れのひどいヤツだ。わしらが最後に会ってから十六日しか経っていないんだぞ。」そう言いながら、済公少年の頭の上に手を載せ、三回叩きながら言った。「降竜伏虎、伏虎降竜、前世の結縁により、今生にて再会じゃ。」

老人に叩かれて、済公少年は全身雷に打たれたような衝撃が走り、目の前の老人が伏虎羅漢であることを急に思い出した。済公少年は実は国清寺の降竜羅漢の生まれ変わりで、仏の国を離れるときに、如来さまは伏虎羅漢にかれに付き添うよう命じたのだった。

済公少年は言った。「あっ、お前は伏虎羅漢じゃないか。おれはもう人間界の薄情さにほとんど嫌気が差したので、おれを呼び戻してくれと如来さまに言ってくれないか。」

済公少年の話聞いて、伏虎羅漢は言った。「ははは、お前が人間界の食欲ぶりや不公平さに嫌気が差していることくらい、如来さまはとっくにお見通しさ。今日わしはお前に、天台山の国清寺で出家して、世を救い民を愛する立派な坊さんになれという、如来さまの言葉を伝えに来たんだ。」

坊さんになるという言葉聞いて、済公少年は眉をひそめ、首を振って言った。「坊さんになるのなら、豆腐を食べて、生臭を絶ち、精進しか口にできなくなる。おれはそんなの耐えられない。」

済公少年の卑し坊ぶりに、伏虎羅漢は笑い出した。「心配するな、如来さまはお前に、肉を食べ酒を飲むことを特別に認めてくれるそうだ。」済公少年はそれを聞いて安心した。

伏虎羅漢はふところからボロボロの芭蕉扇を取り出し、済公少年に与えて言った。「わしはお前に何もあげられるようなものがないので、この扇をやろう。困った時に扇ぐと望みが叶う。注意して使えよ。」言い終わると、伏虎羅漢の姿は消えた。²⁴

24 小济公出家小济公出生在一个富裕的家庭，…（略）…父亲一死，家中就像断了栋梁一样。那几个平日和和气气的李姓本家叔叔，欺侮他们孤儿寡母，一个个撕下平日的笑脸，这个说小济公父亲生前向他借过钱，那个说小济公父亲生前欠他粮，吵啊闹啊，平平安安的家庭一霎时闹成一团糟。小济公的母亲伤心透了，没有办法，只得请舅舅王安士前来应付。可这又有什么用呢？那几个贪得无厌的叔伯根本不把王安士看在眼里。小济公的母亲一气之下，回到娘家跟舅舅一起过日子，把家中的房屋田产抛给小济公和老家人李仁掌管。母亲去了以后，那班人就找上小济公了。日磨夜磨，磨得小济公吃不下饭，睡不着觉，人也一天天消瘦下去。这一天，小济公正坐在书房里发怔，家人李仁进来报告说：“少爷，外面有个老人指名见你。”小济公急忙迎出门去，见是一个须眉皆白的老人，一付仙风道骨的样子，看看好像有点认识，可又一时想不起来，就把老人请了进来。老人喝过茶后，小济公问道：“不知老伯从哪里来？有何见教？”老人不忙回答，站起身来，走到小济公身边，亲热地拍着小济公的肩膀说：“道济，你还认得我吗？从前，我们是老朋友呀！”小济公眨眨眼睛，还是莫名其妙，想不起来。老人一见小济公想不起来，不禁哈哈大笑说：“真是贵人多忘事啊！我们分别才16天呢！”说着话，用手在小济公头上轻轻拍了3下，一边拍，一边说：“降龙伏虎，伏虎降龙，前世结缘，今世重逢。”给老人这一拍一说，小济公顿觉有股清气直贯全身，心里突然清水明镜一般，猛地想起眼前这个老人就是伏虎罗汉。原来，小济公是国清寺降龙罗汉投胎，离开佛国的时候，如来佛祖就是派遣伏虎罗汉护送的哩。小济公说：“啊呀呀，你就是伏虎罗汉啊！烦你回去告诉如来佛祖，就说我讨厌人间世态炎凉，让佛祖叫我回去。”听了小济公的话，伏虎罗汉说：“哈哈，

濟公が「国清寺の降竜羅漢」の転生だというのは、清末の北方系テキスト『評演濟公伝』になってはじめて現れる要素であり、もしこれが濟公生前より地元で語られ続けてきた古い内容だというのなら、天童如浄の賛のように「天台五百牛」となっているか、あるいは江南系テキストのように「紫脚羅漢の転生」となっているべきであろう。「ボロボロの芭蕉扇」に至っては、江南系・北方系のいずれにも登場せず、先に述べたように民国の京劇『濟公活仏』に由来していることを考えると、上の説話の形成時期は800年前どころか、かなり時代を下るものだと考えた方が自然である。

天台への濟公信仰の伝播



図九 現在は濟公古洞と称される瑞霞洞

天台濟公伝説の成立時期を示唆するのが、『濟公伝説』に収録されている以下の「水を瑞霞洞に送る」という話である。

赤城山には全部で十八の洞窟があり、瑞霞洞はその中の一つである。昔は非常に小さかったが、後に天台県玉湖村の裘という居士が、穴を掘って大きくした。掘っている時、周りの岩はとても固いの、なぜか左の隅のところだけ軟らかかった。そこで掘り進めると、一丈ほど行った所で、石でできた井戸が出現した。すると突然、「よかったな、しかし涸れ井戸では残念だね。」という声がして、井戸の中から水が湧き出した。

数日後、人々はこの井戸の上に屋根を被せて建物を造り、「悟月楼」と命名した。そ

如来佛祖早就料定你会厌烦人间的贪心，看不惯世上的不平，今日特地派我前来告诉你，要你到天台山国清寺出家，做一个济世爱民的好和尚。”一听要去做和尚，小济公不由得皱起眉头，摇摇头说：“做和尚，吃豆腐，不吃荤，光吃素，我可是忍受不了的。”看见小济公这副馋相，伏虎罗汉又笑了起来：“不用愁，不用忧，如来佛祖临来时对我说过，特许你吃肉喝酒呢！”小济公这才舒开眉头，笑了起来。临走时，伏虎罗汉从怀中掏出一把破芭蕉扇，递给小济公说：“我也没有什么东西送给你，这把扇，你留着用吧！遇到危难紧急的关头，只要扇上一扇，你要怎样就怎样。”说完话，一晃就不见了。

して建物を周りに合わせて赤色に塗ることにしたが、日に日に水が減ってきて、塗装が終わった時には水が無くなってしまった。

ある日、済公が国清寺から赤城山にやってきた。人々が井戸の水が無くなってしまったことを告げると、済公は笑いながら言った。「心配するな、わたしは井戸の水のことでここに来たのだ。この赤城山は太陽のように赤いが、君たちはさらに悟月楼も赤く塗ったので、火の上に火を加えたことになる。この水は、もともとわたしが君たちのために華頂山の黄経洞から引いて来てあげたのだが、火の上に火を加えた場所を通ってきたために、蒸発してしまったのだ。」

それを聞いて、人々ははっと覚った。「そうだったのですか。ではどうしたら井戸に水を復活させることができるでしょうか。」

済公は言った。「悟月楼を青く塗ればよい。そうすれば、井戸はずっと半分まで水を溜めていられることになる。」そして、人々がお礼の言葉を述べる間も無く、済公はとんぼ返りをして出て行ってしまった。

言われた通り悟月楼を青く塗り直すと、果たして井戸は半分まで水が溜まった。その後、天気²⁵の如何に関わらず、悟月楼の井戸はいつも半分まで水が溜まっているのである。

ここでは、裘という人物が赤城山の瑞霞洞を掘ったという話が述べられている。赤城山は天

25 赤城山上共有十八个岩洞，其中有个“瑞霞洞”，每天早晨，太阳一上山，满洞瑞霞，煞是好看。传说，当初这个洞没有现在这么大。后来，天台县玉湖村有个姓裘的居士想把这个岩洞凿凿大一些。工匠们手拿铁锤铁凿叮叮当当地往里凿，刚刚凿到洞的左边角落里，碰上一件怪事儿。那岩洞四壁的岩石都是硬梆梆的，只有这左角落里有个地方，岩石软得象面团，不需锤凿，锄头一扒就扒掉了。凿洞的人奇煞啦，一个劲地掘下去，掘着掘着，到了一丈深的地方，掘不动了。一看，不大不小，是一个圆圆的石井呀。人们高兴得跳起来。有人突然叹息道：“好是好，只可惜是个枯井。”话未说完，只听得井里发出咕咕咕的响声，众人十分奇怪，伸头朝井里一看。啊呀呀，说话间，水真的来啦。不到一炷香工夫，水就满到井口，碧冽澄清。从此，住在瑞霞洞的人不愁无水吃啦。过了几天，人们见这瑞霞洞不但早晨霞色绚丽，到了晚上，皓月当头，银辉如水，更是妙不可言，加上解决了吃水的困难，就在瑞霞洞的上面建起一座飞檐画栋的“悟月楼”。常人称赞房屋建造得好，都说“里红外黑”。这“悟月楼”也不例外，那些门户梁柱全都漆成朱红色。这一漆不打紧，从漆屋开始那天起，瑞霞洞里的井水就一点一点浅下去。开始时，人们不注意，还以为是天气干旱的缘故。可是等到房屋油漆完工那一天，那井里的水一下子全爆光了。人们没有办法，只得磨着肩膀从山下老远的地方挑水吃。有一天，济公从国清寺来到赤城山游玩。人们晓得济公神通广大，又乐于助人，迎上前去，求告道：“济长老，我们这瑞霞洞里的井水不知为何，一下子就爆光了？”济公听了，哈哈大笑道：“别愁，别愁，我就是为这井水来的。”众人赶紧跪下拜谢。济公道：“施主们不必这样，都快给我起来。我告诉你们，这赤城山本就是赤赭如阳，你们把这洞前的悟月楼漆成红色，变成火上加火。这井里的水原来就是我从华顶山的黄经洞里给你们引过来的，只是一线涓涓之水，那里经得起这火上加火的烧烤呢。”这一说，众人才恍然大悟，纷纷说：“原来如此。那么用什么办法才能使井里重新有水呢？”济公说：“办法倒有一个，不知你们肯办不肯办？”众人说：“济长老尽管吩咐，我们一定照办。”济公说：“只要把这悟月楼重漆一遍，漆成蓝色就是了，这样就能存住半井之水。”说完这话，没等众人拜谢，济公一个跟斗翻出洞去，顷刻之间，就不见踪影了。众人依着济公的话，把悟月楼用蓝色的油漆重漆了一遍。说来也真奇怪，当漆匠刚把蓝油漆涂上墙壁，枯干的井底就渗出一线清水。蓝漆越漆越多，井里的水也跟着越来越满。等到整个悟月楼全部漆成蓝色的时候，那股清凌凌的水，应了济公的话，刚好满了半井。从此，瑞霞洞里的井水就满到一半的地方，不管天气多涝多旱，始终不满也不浅。

台山系の最南端に位置する小さな台形の山で、斜面の赤い色の地層がくっきりと浮かび、その間に洞窟の入り口が幾つもぽっかり口を開けているという、非常に不思議な外見を持つ。そのせいか、ここは市街地に接しているにもかかわらず、天台山系の中でも宗教施設が集中する場所となっており、しかもそれは、東晋の仏僧・釈曇猷の居所で、葛玄煉丹処との伝承も有する紫雲洞や、道教第六洞天の玉京洞など、多くが洞窟を中心に作られている。もちろん、本来は背景にいわゆる洞天思想があったはずだが、上の「伝説」には、あまりそうした要素は感じられない。

なおこの「伝説」は、いつの時代の出来事なのか語られていない。済公が登場するため、宋代の話かと思ってしまうが、実は徐聚垣の「了真居士裘先生の新たに瑞霞洞を鑿つに贈るの序」²⁶という碑文に記されている、以下の内容が元だと思われる。

瑞霞洞は、了真居士が開鑿したものである。居士は、姓は裘、名は炳濤、学名を潮といい、月波と号した。了真というのは済仏にいただいた名前で、そのため自ら了真居士とも号した。天台の西郊の玉湖村の出身である。…（略）…晩年は仏教に親しみ、仏教經典や道教經典などを読んで、その教理を学んだ。民国初年、済仏がわが天台に「宣化」してきた。天台の人々は、十人中八九人までもがこれを信奉した。居士は最初は信じなかったが、民国 16 年（1927）2 月、兄の月堂や、従兄・友人らとともに泉亭に行った時、ちょうど扶乩が行われており、済仏の神霊が飛ぶように字を書き、靈驗あらたかなのを見て、大いに感服した。それからというもの済仏を崇めたが、（扶乩の場所が）街に近いため、場所を移さなければならぬと感じていた。数日後、居士がメンバーの陳香甫と赤城山に行ったところ、香雲洞の左側にガランとした洞穴があるのを見つけた。上側は壁のようにそびえ立ち、赤城山の中心点に達している。周りを見渡すと、北は華頂山、南は玉笥門を望み、正面には科山や黄榜があり、眼下には文水や赭溪といった溪流が周りをめぐっている。たくさん家や、そびえ立つ山々に囲まれている様子は、まことに宇宙の大観、神州の奇蹟であった。居士は喜んでいった。「こここそは、済仏がおられるべき場所だ。」そこで大安吉日を選び、石工に命じて洞穴を削らせた。当時、カーンカーンと鳴り響く音は、遠く数里の先まで聞こえたという。そして数年を経て、石室四間が完成した。…（略）…岩の間から泉が湧き出て、赤みがかった清らかな水を得られたのも、驚くべきことであった。惜しいことに滴る量は少なく、一日僅か数斗にすぎず、仏様に出すお茶を入れると、ほとんど残らなかった。仏祖（済公）は以前、「嵐が去れば水が集まってくる」と言われたが、いつその願いが叶うのかは解らない。この洞窟は、民国 16 年 6 月に開鑿し、20 年 8 月に完成した。横幅三丈六尺、深さ二丈四尺で、いずれも居士が巨額の費用を負担してできたものである。洞窟の前の悟月楼も、居士たちが建設した。落成した後、居士は友人たちとともに、毎月一日と十五日に精進料理と酒を持って洞窟にやってきて、扶乩を行った。そこで得られたお告げは、『清夜鐘声』に発表した。²⁷

26 許尚樞編著『天台山済公活仏』（国際文化出版公司、1997 年）、100-104 頁。

27 瑞霞洞者、了真居士所開辟也。居士姓裘氏，名炳濤，學名潮，號月波。曰了真者，濟佛所賜之名也。故亦自號了真居士。祖居邑西玉湖里。…（略）…晩年好佛理，無論金經道藏、三教真言，皆參考而得其精要。民國初年，

「伝説」は一見すると済公生前のここのようであるが、実際には民国期に裘炳涛が瑞霞洞を掘削し、そこに済公を祀る「済公院」を建設したことが元になっている。話に出てくる井戸の水は、ここで言う掘削時に岩の間から泉が湧き出たことを指すのだろうし、済公がアドバイスしたというのも、当人が在世中にやって来たわけではなく、扶乩によって済公の神霊が語ったということなのだろう。

また注目すべきは、民国初年に済公が天台に「宣化」してきた、という記述である。これは済生会の王震が上海から天台にやって来て、市街区に「済仏院」を建設し、扶乩を始めたことを指すものと思われる。碑文で、裘炳涛が最初に済公の扶乩に接触した「泉亭」の街に近い所がこれにあたる。またその結果、「天台の人々は、十人中八九人までもがこれを信奉した」ということであるが、もし済公の伝説が故郷の天台で長く信奉され続けてきたのであれば、このような記述にはなり得ないだろう。これは、済公信仰そのものが、民国期に済生会によって上海からもたらされたことを示唆している。

こうした点から考えると、他の天台の多数の「済公伝説」なるものも、済生会が持って来た『評演済公伝』系のテキストや、それに基づいて語られた扶乩を元に、短期間で形成されたものである可能性が高いだろう。ただもちろん、だからと言って天台済公伝説は価値がないというわけではない。『済公伝説』に収録された説話群は、そうした背景の元に成立したものであるとして非常に大きな研究上の価値を有しているし、説話文学としてすぐれたものも多い。

また、成年後の済公は杭州を中心に活動しているため、天台でのエピソードは勢い杭州に行く前の少年時代が中心に語られることになるが、結果的に一休から周回遅れで「小僧化」が起こったのは、偶然とはいえ面白い。さらに1989年には、少年済公が活躍するアニメ『済公』が作られており、一休説話がアニメ『一休さん』として消費されたのと同じような道すら辿っている。

天台の済公史跡

天台には現在、大きく分けて四つの済公関連史跡があり、うち三つは赤城山に集中している。

済佛宣化吾台。台民之傾心敬奉者，什居八九。居士初不之信。丁卯二月，與胞兄月堂、從兄友三諸先輩，赴泉亭。適済佛臨壇開沙，運筆如飛，靈應若響。居士見之，大加悅服。自是之後，日以済佛為兢兢。特以地近囂塵，終非久居之所。閱數日，居士同社友陳君香甫游赤城。見香雲洞左側，有穴谿谿，不合如蟻。其上則壁立千尋，磊落軒昂，得赤城之中點。回首遞瞻，北有華峰，南有玉笥，科山、黃榜，揖讓於前，文水、楮溪，回環於下。邑屋鱗次，列岫爭參。誠宇宙之大觀，神州之奇蹟。居士喜曰：此即済佛定居之所也。於是涓吉期，命匠石，剗荒穢，鑿幽險，鏗鏘訇訇，斧石之聲，遠聞數里。歷數年之久，共成石室四間。…（略）…有泉自巖罅中出，紺寒清澈，獲量較重，亦一奇也。惜涓滴不多，日僅數斗。除供佛烹茶外，無餘量焉。昔佛祖有言，風平浪息，真集津生，特未知何日得遂斯願也。此洞開鑿自丁卯六月，告成於辛未八月，橫闊三丈六尺，直深二丈四尺，皆居士特出巨資構造而成。洞前晤月樓，亦居士諸會友創建。落成之後，居士與諸友，每逢朔望，謹備素菜酒果來洞參謁，虔祝開沙。其詩詞訓誦，刊載《清夜鐘聲》中。

28 裘炳涛については、許尚樞・周榮初『名人与天台山』（西安地圖出版社、2004年）98-100ページに詳細な伝記がある。



図十 赤城山（左下が済公院、中央が済公東院、右が玉京洞）

一つ目は赤城山の西側の中腹にある瑞霞洞である。ここは先に述べたように、かつて裘炳濤が済公院を建設した場所である。戦後荒廃したため、済公一族の子孫を名乗る李先才氏と、済公伝説の収集を行った曹志天氏が音頭を取り、南京大虐殺記念館を手がけたことで知られる地元出身の建築家・斉康の設計で、1989年に洞全体を覆う形で済公院が再建された。また敷地内には伝説で語られた井戸が、また隣には同じく伝説で青く塗られたという悟月楼も修復されている。なお洞自体は現在、「少年済公読書処」と説明されているが、済公扶乩の場だったという記憶が、そうした表現に変わっているのだとしたらおもしろい。



図十一 済公東院

二つ目は「済公東院」である。これは、済公院を1993年に参拝した台湾の台中市聖寿宮参拝団が出資して、赤城山の東側の中腹に新たに建設した施設である。中心は「済公紀年堂」と称する大きな済公活仏の座像が置かれた仏寺様式の建築物で、またそのすぐ後ろには崖面を削って洞穴状にした「白雲洞」がある（またもや新たな洞窟の掘削である！）。ここには多数の済公像が曼荼羅のように並べられているが、面白いことにそれらはいずれも露骨にテレビドラマ『済公』

の游本昌氏そっくりの姿をしている。台湾人は、中国のテレビドラマは基本的に見ていないはずだが、製作に当たったのが地元の天台県建設設計室だったため、中国人側のイメージがストレートに反映されたのだろう。



図十二 白雲洞の済公像

三つ目の済公史跡は、玉京洞の近くにある「書記岩」である。これは「帽子を被り尖ったアゴを持つ済公の横顔に似ている」とされ、「道済の墓誌銘を書いた居簡が、嘉定2年（1209）²⁹に天台を訪れた際、浄慈寺の書記だった道済を偲んで名付けた」と説明されている。



図十三 書記岩

しかし、先にも述べたように、現在のような、帽子を被る済公の姿が一般化したのは民国期の『済公活仏』以後で、それ以前は例えば『済顛大師醉菩提全伝』の挿絵や、『済公活仏』上演中に撮影されたとされる済公の「心霊写真」でさえも帽子は被っておらず、どちらかというと丸顔をしている。したがって、「済公の顔に似ている」云々は、現代の感覚で（ひょっとするとこれも、テレビドラマのイメージで）言っているだけであろう。

29 裴斐『走出天台山の済公』（中国国際文化出版社、2006年）、39ページ。



図十四 『済公活仏』上演時に撮影されたとされる済公の心霊写真

また、居簡云々というのは、『北磻文集』巻二に収録されている「釈籤岩記」の以下の部分が元になっている。

嘉定二年の春、私は（天台山系の）華頂まで登り、（瀑布のある）石梁を渡り、国清寺を訪ね、仏隴で休憩を取り、（それによって）仏の道を速やかに修めることができた。私はさらに赤城山の頂上まで登った。浣腸井は枯れていたが、底をさらってみると、乳白色の水がまだ湧き出ているようだった。書記岩を眺め、焚藁池まで行き、釈籤岩で休憩した。山川の風景を眺め渡し、立ち去るのに忍びな³⁰かった。

確かに居簡は赤城山で書記岩なるものを見ているが、道済についての記述は無い。そもそも、見知らぬ土地で目にした岩に、「自分の寺の書記の顔に似ている」と言って勝手に名前を付け、しかもそれに対して何の説明もないということは、あまりあり得そうにない。書記岩は、例えば字を書く机に似ている、ということで、当時すでにそう呼ばれていたものに、居簡が言及したものと取る方が自然だろう。むしろこの背景には、天台の赤城山が確かに済公の故地であるという、目に見えて解る「物証」はあって然るべきだし、またそれを期待してしまうという、現地関係者の発想があるように思う。

四つ目の済公史跡は、市街地に位置する「済公故居」で、道済が少年時代を過ごした「李府」が再現された観光名所となっているが、ここは実は済生会の活動拠点であった「済仏院」の跡地である。それが済公出世の場所として語られていること自体、天台の済公信仰の素性を物語っていると言えるだろう。ちなみにここにも済公像はいくつか安置されているが、やはりいずれもテレビドラマの游本昌氏の顔をしている。

30 嘉定二年春、余陟華頂，度石梁，訪國清，憩佛隴，宜獨蒙養正速。余登赤城絕頂，浣腸井智，浚之則甘泉源源有乳色。瞰書記岩，臨焚藁池，憩釋籤岩。周攬江山，裴回不忍去。



図十五 濟公故居



図十六 游本昌に似た濟公像

もし濟公の物語を「非物質文化遺産」とするなら、物語形成の「本場」であった杭州の方を認定すべきなのに、それが天台になったことも、こうした観光開発が関係しているように思う。杭州は、物語だけを取っても白蛇伝伝説や、東坡肉の蘇東坡伝説があるし、また杭州評彈のような芸能や、十八般武芸のような伝統武術もあるので、濟公伝説くらいは余所にあげても構わない。これに対して天台は、確かに靈山・天台山を擁し、数々の仏教・道教遺跡も抱えてはいるが、現代の中国人にアピールできるのは、テレビドラマによってよく知られた濟公しかないのである。

おわりに

現代の中国人が、天台大師智顗も寒山拾得も知らず、第六洞天や桐栢宮の重要さも解らず、天台山でテレビドラマの済公そっくりの仏像を拝んで喜ぶ姿を、「無教養」と言って嗤うのは簡単である。しかし天台宗が消滅し、洞天思想も風化してしまった今、それらを理解しろと言う方が無茶な要求だろう。そもそも、済公の物語が展開した語り物・歌い物や演劇といった大衆芸能は、現代であればテレビドラマになるわけで、両者の間に本質的な差はない。そうした意味では昔と同じことをやってるだけで、テレビの済公を信仰するのは極めて正常な行為だとすら言える。

現在行われている済公信仰は、天台山という「聖なる地」に対する、現代人なりの表現のあり方として捉える必要がある。天台山は、「天台宗の総本山だ」とか、「寒山拾得が隠れ住んだ場所だ」とか、「十大洞天の一つだ」とか、「全真教南宗の拠点だ」といったように、いわばその時代ごとに関心を持たれた宗教的トピックに合わせた場所として語られ続けてきた。それが現代では、「済公活仏の故郷だ」という形を取っているだけなのである。

そしてそれは、済公そのものについても言えるだろう。そもそも済公は、確かに歴史上実在した道済がモデルではあるが、基本的には歴代の風顛僧・神異僧のイメージの集大成であり、いわば中国人のある種の宗教的人物に対する期待が凝縮された存在である。済公に対してしばしば言及される「親しみやすさ」とは、難解な教義や面倒な修行といった「雑夾物」が無く、かれらの望むイメージそのものであることの表明として捉えることができるだろう。それがさらに、近代的メディアによって現代人の嗜好に合うようアレンジされているのだから、人気が出ないはずはないのだ。

なお、済公の「神異」は、風顛を保証する以外にもう一つ、「伏虎降竜」のイメージの存在も指摘できるのだが、本稿では紙面の制約もあり、扱うことができなかった。これについては、また稿を改めて論じたいと思う。